



花*
咲く
夜
に
君
の
名
を
呼
ぶ

津籠睦月



序 花咲く頃に君を想う

外は雨だった。けぶるように降る春雨は、山々を白く霞ませ、森の色を一層濃く深く見せていた。

「せっかくの月待の日にあいにくの天気ですねえ」

茶店の主人は苦笑混じりに話しかける。

「月待？……ああ、今流行りのアレか」

俺は適当に答え茶をすする。月待講はいつの頃からか流行りだした月神信仰だ。夜半に出る二十三夜の月を待ち、神に供物を捧げて夜通しの宴を行えば、願いが叶うという。

「おや、お客さんは願掛けなさらないんですか？」

「あいにく、神に叶えられる類の願いは持っておらぬからな。この辺りの人間はよくやるのか？」

「月待ですか？へえ。こんな龍神様の泪雨の降る頃にはさかんに行われるようですねえ」

「龍神の……泪雨？」

さすがに聞き咎め、その語を繰り返すと、店主は笑って天を仰いだ。

「この雨のことですよ。この辺りの山ではこの時季になると、よく天を飛ぶ龍神様のお姿が見られるそうで、いつしか春の、こんな風にしとしと降る雨を『龍神様の泪雨』と呼ぶようになったそうです。龍神様の流す泪が雨となり天から降ってくるのだと」

俺は何も答えず茶を飲み干した。苦いものが胸に広がるのを感じる。

「馳走になった。勘定を頼む」

「もう行かれるんですか？まだ雨は止んでおりませんよ」

「構わん。これしきの雨、大したことではない」

勘定を済ませ、そのまま店を出ようとし、俺はふと思いついて店主に声を掛けた。

「そうだ。お前、花は好きか？」

「花？へえ。好きと言えば好きですが」

「ならば、これをやろう」

渡された花の種に店主は首を傾げる。

「これはどうも。それで、これは何の種なんです？」

「幸を呼ぶ花の種だ。『自分以外の誰か』の幸を強く願って育てれば、見る者に幸を与える花を咲かせる」

「え……？」

店主の疑問の声には答えず、俺は今度こそ店を後にした。

しばらく峠の道を行き、人気が無くなったのを見計らい、俺は変化を解いた。否、新たに変化したと言った方が正しいかもしれない。

俺の姿は銀の鱗に覆われた、長大な龍の姿へと変じ、灰色に曇った天へ向け滑るように泳ぎだしていた。そう、この辺りの村人がこの時季に見るといふ龍神とは、俺のことなのだ。ただし、

今降るこの雨は俺の涙などではない。俺の涙はとうに涸れ果て、おそらく、もう流れることはない。だがもしこの雨が、もう泣くこともできぬほどに心の麻痺した俺の代わりに天が流す泪なのだとしたら、俺も少しは救われる気がする。

やがて、ふいに眼下に鮮やかな色彩が広がった。それは、険しい山々の合間に隠れるようにひっそりと存在する花園。急峻な崖に守られ、俗人では登ることも下りることもできぬ秘められた花園だ。俺は再び人の姿へと変じ、そこへ降り立った。

花園の中央には、まるで墓標のように一本の木が立っている。俺はいつものようにその木に歩み寄り、愛しむようにその樹皮に触れた。そして、呼びかける。この木の下に眠る、もうどんなに呼んだところで声の届くことのない君へ。

.....花夜。俺は君を忘れない。幾百の歳月を越えて尚。目を閉じれば今でも君との思い出が蘇る。君と過ごした、短い、けれど幾百の歳月に匹敵するほどに濃く、満ち足りた日々が.....。

第一章 鳥追う少女

始まりは一羽の鳥だった。木の中に覗く小さな天を一筋に横切っていく白い鳥。それは真上を横切る刹那、細い首を優雅に曲げて俺を見たような気がした。

(霊鳥？なぜ、このような所に……？)

それはただの鳥ではなく、人の霊が鳥と化したもの。だがそれは当時俺がいた彼の地では、まず見かけるはずのないものだった。なぜならそこは、かつては小国がひしめいていたが、大国に攻め入れられ、戦場となり荒れ果て、荒ぶる神の住処となり、今では人一人住むことができずに見放された場所だったからだ。

『大刀雨零る魚眼瀉の国』、それがその時俺の居た、国とも呼べぬ国の呼び名。『直路の地』の真ん中、後の世にカスミガウラ、キタウラという名の水海と化る内海に三方を囲まれた、静かな場所だった。

ある事件を境にそこに住みついた俺は、鬱蒼と繁る森の中、そこだけぽっかり円く開けた枯葦の草野に数百年もの間、独りきりで座していた。

人間は時折訪れた。だがそれは皆、俺にとって招かれざる客人——神たる俺を自分達の国の鎮守神として迎えようと勧請に訪れる巫女や男巫ばかりだった。そして、彼女もまたそんな巫女の一人として俺の前に現れた。

「私の名は花夜。『千葉茂る花蘇利国』の社首にして、国の首長・萱津彦が娘。我が国の鎮守となってくださる神を求め、この地にやって参りました。どうか私と共に花蘇利国へおいで下さい」

鳥の後を追うようにして現れた少女はそう言って俺の目をじっと見つめた。年の頃十三、四と思しきその少女は、いかにも神住まぬ国の巫女らしく、素朴な衣裳に身を包んでいた。袖なしの盤領の上衣と、沢山のひだがついた緋色の裳。その上に重ねた白い麻の意須比を、幅広の三角文様の帯で結び、肩には木綿襷。首と手足には勾玉を連ねた御統が揺れ、腰には縁に鈴をあしらった円い白銅鏡を吊り下げている。縁に鈴を配した『鈴鏡』は東国の巫女の証。その中でも少女の持つ五つの鈴がついた鏡は『五鈴鏡』と呼ばれていた。

「先の霊鳥はお前の侍従か？」

俺が問うと花夜は首を振った。

「あれは我が母・鳥羽の霊です。死しても尚、私を守り、導いてくれているのです」

俺は何の感慨もなくそれを聞いた。当時は今よりも更に人死にの多い時代だ。戦も病も世に溢れていた。だからこそ人々は、そんな災いから自分達を救ってくれる鎮守神を求めたのだ。

「女子、俺の噂は知っているのだろうか？森を燃やし、幾人もの人間を焼き殺した、手のつけられぬ荒魂だと。その齢で生命が惜しくはないのか？」

わざと脅すように低い声で問うが、花夜は少しも怯まない。

「私の生命は、私がこうと決めた道を貫くためにあるのだと思っています。その道を貫くために失ったとしても、惜しいとは思いません。それに、今の私より稚くして亡くなった人を、もう何人も見送ってきましたもの。生命とは儂く、いつ終わるとも知れぬものだと分かっています。

だから、毎日を悔いのないよう一生懸命に生きてきたつもりです。覚悟はできています」

「齢のわりに立派なことだ。しかし口だけなら何とでも言える。その覚悟、どこまで保つか見せてもらおうか」

言っただけで指を鳴らした。直後、周りの草陰から、白い鱗に赤い眼を持つ蛇達が次々と這い出してきた。俺に仕える神使の蛇達だ。蛇達はそのまま花夜の周囲を取り囲み、半開きの口からシャーッと威嚇音を出す。普通の少女ならば悲鳴を上げるか気絶するかしているところだ。しかし花夜は身動きもせずその場に留まっていた。俺は苛々して吐き捨てるように告げた。

「女子よ、去れ。俺は何れの国の鎮守にもなる気はない。国同士の争いに巻き込まれるのも、この力で他国を滅ぼすのも御免だからな」

「あなた様の御力を争いのために使うつもりはありません！私はただ、祖国を——大切な場所や人達を守るための力が欲しいのです！他を滅ぼすためでは決してありません！」

花夜は必死に訴える。その声に、頭の中で懐かしい若者の声が重なった。

——ならば私は、他を滅ぼすための力でなく、大切な何かを守りきるための力をそなたに授けよう。

(……真大刀)

一瞬、我を忘れて絆されそうになり、あわてて頭を振る。

(違う。たまたま似たような言葉を口にしていただけだ。この女子は真大刀とは違う)

「皆初めはそう言う。だが結局は同じことではないか。たとえ自らにその気がなくとも、他国が攻め入ってくれば必ず戦は起き、血が流れる。人は争い無しには生きられぬ。もう沢山なのだ。そのような醜いものを目にするのは」

「……そうですか。だからあなたはこうして独り、この場所にいらっしゃるのですね。そんな哀しい戦を、今までに沢山ご覧になっていらしたから……」

花夜の瞳には深い同情と理解の色があった。

「分かったのなら諦めて去れ。これ以上俺を煩わせるな」

だが花夜は去らなかつた。

「この世から争いがなくなるとしても、争いを避けようとする者がいて、それを避けるために必要な力があつたなら、せめて目先の争いだけでも無くすことができるのではありませんか？」

「……何？」

「戦ばかりの世の中が嫌だと仰るなら、それを变えるために動けば良いではありませんか。嘆くばかりでは何も変わりません。この世も、あなたの御心を覆う気鬱の感情も。たとえ叶わなかつたとしても良いではありませんか。己の手で為せるだけのことを為したなら、少なくとも己の心を救うことはできるはずですよ」

俺は目を瞠った。神に対しここまでズケズケ物を言う巫女は初めてだった。

「女子、お前は俺が恐ろしくはないのか？」

「私は八百万全ての神を畏れ敬っておりますよ。巫女ですもの」

花夜はしれっと答えた。だがその表情はどう見ても本気で俺のことを恐れている者の表情では

なかった。

「そうか。お前、俺が人の姿をしているから、そのように平然としていられるのだな」

俺は向きになっていた。どうにかして目の前の少女を恐がらせてやろうと軀を変化させる。それまでとはまるで違う姿になった俺に、花夜は目を見開いた。その唇から思わずというように眩きが漏れる。

「……大蛇」

そう、あの頃の俺は、まだ龍になりきれぬ、額に角持つ中途半端な蛇神だった。

「どうだ？俺はお前など一口で丸呑みにしてしまえるのだぞ。恐ろしいだろう？」

知らず昏い笑いがこみ上げる。だが、花夜は怯えるどころか、頬をゆるめ、ふわりと微笑んだ。あまりに思いがけないその笑みに、俺の方が虚を衝かれ、思わず変化を解く。

「どうした、お前。気でも触れたか？」

「いいえ。気は触れておりません。笑いたいから笑っただけです」

「何故笑う？笑うような場面ではないだろう」

「いいえ、笑う場面です。だって、ここで怯えたり泣いたりしたら私の負けでしょう？」

(何なのだ、この女子は。聡明かと思えば変わり者で負けず嫌いで、妙に肝が据わっている)

先ほどとは別種の笑いがこみ上げてくる。それは数百年ぶりに覚えた感情だった。最早忘れかけていた、愉快という名の感情。

「女子よ、もし俺がお前の国と鎮守となるなら、お前は俺に何を寄越す？」

それは、いつもならば誘いを断る口実とするための問いかけだった。花夜はしばし考え込み、ほんの少し困ったような顔をした後で口を開いた。

「では、花かんむりを」

「……何？」

「春には花かんむりを、夏には郷で一番美しく涼やかな水辺を、秋には鮮やかに色づいた黄葉の葉を、冬には社から見上げる満天の星を。私が好きなもの、綺麗だと思ってきたものを、全てあなた様に捧げます。私のこの小さな手のひらからあなた様に差し上げられるものなど、ほんのささやかなものばかりですが、それでも私にできる限りの力で、あなた様に幸を捧げます。共に美しい景色を見出し、思い出を重ねていきましょう。この世に生きてきて良かったと思えるように」

それは初めて聞く答えだった。貴重な財物や、贅を凝らした社に衣、味わい尽くせぬほどの山海の珍味——今まで訪れた巫女達が口にしたのはそのようなものばかりだった。『お前は』何を寄越すのかと問うているのに、返ってくる答えはいつでも、巫女達当人ではなく『国から』俺に捧げられる見返りばかり。『正解』を返してきたのは花夜が初めてだった。しかもそれは俺の想像を遥かに超える答えだった。

「面白い。良いだろう。女子、お前の神となってやる。今からお前は俺の巫女だ」

花夜の顔が明るく輝く。

「はい！心を込めてお仕え致します」

こうして俺は、俺の生涯ただ一人の巫女となる少女と契りを交わした。

第二章 神の生まれ出づる杜

「私はこれから、あなた様のことを何とお呼びすればよろしいのでしょうか？」

魚眼瀉の国を抜け、茨蕨置(うばらき)の杜に入った辺りで花夜が訊いた。

「お前、俺の名は既に知っているのだろう？俺の噂は周りの国々にも知れ渡っていたはずだ」

「はい。ですが、あまり良き名とは思えません。ツキタチアラミタマノカガチヒコ様だなどと……。あなた様は最早、荒魂ではありませんのに」

ツキタチアラミタマノカガチヒコ——俺の存在を知った周りの国の民達が勝手に付けたその名は、大刀に依り憑く荒ぶる蛇の男神という意味を持つ。

「俺はそのようなこと、気にはせぬが。ならば、お前が好きに名付ければ良い」

「好きに……ですか」

花夜は困惑した顔で、しばし沈黙した。

「……では、ヤトノカミ様というのは、いかがでしょう？」

「ヤトノカミ？」

「はい。あなた様は谷地にいらっしゃったでしょう。ですから『谷地の神様』です」

「……少し安直過ぎやせぬか？」

「好きに名付けろと仰ったのは、あなた様でしょう。それに、無闇に本質を表した名よりは良いと思いますが。名を知らただけで相手に弱みを暴かれるような名では困りますもの」

花夜はむっとした顔で反論する。彼女の言うことは真理だった。『名付け』というものは、この世の最も基を成す呪術の一つだ。『名』はそのモノの本質を表し、力を与えもすれば、逆に奪いもする。

「まあ良い。俺はお前の神なのだから、お前の好きに呼べば良いさ」

「では……ヤト様、とお呼びしてもよろしいのですか？」

「ああ。好きに呼べと言っている」

「では……『ヤト様』」

花夜は、はにかんだように微笑んで名を呼んだ。俺の後を一、二歩離れ、駆け足でついてくる花夜の顔には、いつも笑みが浮かんでいた。俺と共にいることが嬉しくてたまらないとでも言うように。俺はそれを、孤独な勧請の旅に人恋しくなったせいだと捉えていた。俺が彼女の笑みの本当の理由を知るのは、もう少し後のこととなる。

異変に気づいたのは、杜のだいぶ奥深くに足を踏み入れた頃だった。それは、空を漂う光だった。蛍火のように淡く明滅しながら飛んでいく、小さな光。一つや二つではない。それは群れを成し、一点を目指して飛び続ける。

「あれは……？木霊か何かですか？」

「いや。あれは『祈魂(ホギタマ)』。人間の強き思いが形を成したものだ」

光の飛んでいく先に、強い靈異の気配を感じる。俺はこれから何が起ころうとしているのかを、すぐに察した。

「花夜、急ぎの旅でないなら、少し寄り道をして行かぬか？きっと珍しいものが見られる」

「珍しいもの、ですか？」

「ああ。神だとて、そうそう立ち会えるものではない、稀なる場面だ。『神』の生まれ出づる瞬間を、目にできるかも知れぬぞ」

深い藪を抜けた先には、一本の藤の巨木があった。

「.....なんて美しい藤の木.....。一体どれほどの歳月を経れば、このような大木に育つのでしょうか.....」

花夜が感嘆の声で呟く。藤の木は、その太い蔓を大蛇のように他の木の幹に絡みつかせ、天を覆うように広げた枝に満開の花を咲かせている。その花房が風に揺れる様は、まるで薄紫の花の滝のようだった。

杜の四方から飛んで来る祈魂の群れは、その花の一つ一つに宿り、藤の木全体をぼんやりと光り輝かせていた。

「この祈魂はどうやら、藤の木に寄せる人間の想いが形と成ったもののようなのだな。藤の木に対する人間の、愛する心や憎む心、感謝の念に『祈がい』——ありとあらゆる想いが祈魂と化り、その想いの対象に依り憑く。それは積もり積もって、やがて莫大な霊力の塊となり、神を降ろす器を成すのだ。祈魂がこうして、目に視えるまでに強くなり、光り輝くのは、その『器』が間もなく完成する兆だ。もうすぐここに、藤の木神が降臨されるぞ」

「.....『降臨』？それは、何処か他の世界から、この『祈形国』へ、神様の霊がいらっしゃるといことですか？」

「そういうことになるのだろうか」

「何処の世界からいらっしゃるのですか？神話に出てくる高天原や豊葦原瑞穂国や常世国という世界は、本当に在るのですか？」

好奇心のままに問いかけてくる花夜に対し、俺は無言になった。花夜はハッと表情を変える。

「すみません。もしかして、人間が聞いてはならぬ話でしたか？」

「.....いや、そうではない。俺自身も識らぬのだ。神や精霊の霊が何処より生まれ来るのかを。この世界のことならば、誰から教えられずとも大概のことは識っている。だが、この世界の外のことは、まるで分からぬ。そのような理になっているようだ」

口籠りながらなんとか説明を終えたその時、背後の茂みが派手に鳴った。

「お？何だ、お前。こんな所で一人で何をしている？」

振り向いた先には数人の男が立っていた。格好から察するに、木を伐ることを生業とする杣人(そまびと)と思われた。

「私は巫女です。神を迎える勧請の旅の途中で、ここに立ち寄らせて頂いております」

巫女という高い身分にありながら、花夜はどんな人間に対しても丁寧な物腰で接していた。男達はやや面食らったように花夜を見つめる。

「.....へえ。あんたみたいな女子さんが、一人で旅を、ねえ」

男の一人が下卑た笑みを浮かべた。その時の俺は、俗人からは視えぬよう姿を幽したままだっ

たから、男達の目には女子の一人旅のように映ったのだろう。男達があらぬ行動に出るようなら姿を顕し花夜を守ろうかと思った、その矢先、別の男が先ほどの男をたしなめた。

「妙なことを考えるなよ。相手は巫女様なのだぞ、この罰当たりが」

「でもよ、霧狭司国(むさしのくに)のお偉いさんからしたら、他国の巫女が靈力を失うのはありがたいことなんじゃねえのか？」

「霧狭司……」

花夜が硬い表情で呟くのが聞こえた。俺も男達を見る目を険しくする。それは俺にとって因縁浅からぬ国の名だった。

「ばか。それで俺達が罪を犯し、汚れた手で御神木に触れたのでは本末転倒だろう。神坐として使えなければ、苦勞してこの木を伐って帰っても何の報酬も得られんのだぞ」

そう言って男が指差したのは、目の前で咲き誇る藤の木。花夜は顔色を変えた。

「伐る？この木を、ですか？」

「ああ、そうだ。だから悪いが、よそへ行ってくれないか？このままここにいられたら危ないんでね」

「いけません！この木には間も無く神様がお宿りになるのです！伐ってはけません！」

花夜の必死の訴えを男達は一笑に付した。

「何言ってんだ？どこに神様がいるって？どう見たって、ただの木じゃねえか」

何の靈力も無いこの男達には、藤の木を輝かせる祈魂の光など、視えはしないのだ。

「だいたい、それが本当だとしても、所詮は藤の木の神様だろう？俺達がこの木を伐るのは、この世の全ての水を司る水神様のため。藤の木の神なんぞとは格が違うんだ」

「格が違う？確かにそうだな。神の間にも序列というものは存在する。この世の基を形成す風火水土の四柱の神と比べられては、大概の神が下位に置かれるだろう。だが神は神。お前たち人間が容易く傷つけて良い存在ではない」

俺はそれ以上黙って男の話の聞いていることができず、姿を顕した。男達はぎょっとして後ずさる。

「こいつ……！どこから現れた!？」

「待て！銀の髪に紅い瞳……こんな色、人間にはあり得ない！神だ！」

「そうだ。神だ。お前たち人間の敵う存在ではない。この木のことは諦めて、すぐに立ち去れ。さすれば見逃してやろう」

だが男達は去らなかった。彼らは顔を強張らせながらも、冷静に俺から距離をとり、腰に下げた袋から何かを取り出した。

「まさか本当にこんなものを使うことになるとはな……」

「ああ。神祇官様の仰ることは真実だった。この杜には荒ぶる神や精霊が本当に棲んでいるのだな……」

男が手にしたのは一枚の瓢の葉だった。男はそれを飲み水の入った皮袋の中へ放り込む。直後、皮袋から、到底その中に収まっていたとは思えぬ量の水が噴き出した。

「何!?!まさか、祈道の業!?!」

悲鳴のように叫ぶ花夜の目の前で、噴き出した水が透明な蛇の形を成していく。水の精霊、すなわち水霊だ。

「瓢は水神の御印だ。おそらく霧狭司国の巫女が、予め術を施し杵人達に渡しておいたのだろう。……厄介なことを」

俺は小さく舌打ちした。蛇神は水の靈力に属する神。俺が蛇身に変化したところで、水霊と闘うにはあまりに相性が悪い。

「大丈夫です。私にお任せ下さい」

花夜はおもむろに腰から五鈴鏡を外すと、その鏡面を天へかざした。

「母さま！時間を稼いで下さい！」

花夜が叫んだ瞬間、鏡から白い光が飛び出した。それは見る間に白鷺のような形へと変化し、水霊へ向かっていく。花夜の母・鳥羽の靈鳥だ。鳥羽は水霊を翻弄するようにその目の前を素早く飛び回り、注意を引きつける。その隙に花夜は、沓を脱ぎ捨て素足で土の上を踊りだした。

手にした五鈴鏡を振り鳴らし、身につけた珠をしゃらしゃらと響かせ、身体全体で音律を奏でる。それはこの時代でさえ既に忘れられかけた、古の素朴な祭祀だった。

「千葉茂る花蘇利国の社首・花夜が祈がいます。この世界のあまねく山を司る大山祇神が子神・木の花の散るを司る木花散流比売尊、どうか我が身に一時その魂をお分け下さい」

謡うように神への祈言を口にする花夜の瞳は、次第にとろん、と虚ろになってくる。神の魂をその身へ降ろすため、無我状態となるのだ。やがてその瞳が、それまでとは別の光を帯びて輝く。

『木霊よ、茨蕨置の杜にて今、花咲ける木々の精霊たちよ、その種子を、花弁を、我が元へ疾く散らせ』

花夜の唇から、花夜のものではない強い言霊を秘めた声が紡がれる。直後、轟音が耳を打った。杜の木という木が枝を揺らし鳴り騒ぐ音、それにより巻き起こされる風の音、耳を覆いたくなるようなその音と共に、何かがちらへ押し寄せてくる。

「ヤト様！目と鼻を塞いで下さい！」

花夜が叫ぶ。反射的にそれに従うと、何かひどく細かいものが頬を撫で、水霊の方へ通り抜けていくのを感じた。

「何だ!?目が……っ、目が痛いっ！」

「ぶはっくしょ……っ、くしゅっ、くそっ！鼻汁が止まらん！」

男達が悲鳴を上げる。おそろおそろ目を開け、俺は状況を悟った。

「なるほど。水の靈力を削ぐには土、か」

目を閉じる前までは透き通っていたはずの水霊の軀は、今や様々な色が混じり合い、まだらに濁っていた。濁りの正体は杜中から散り集まった花粉や花弁だ。

「水の動きを鈍らせるには、土をかけて泥にしまえばいい。でも私には土神様や山神様をお呼びするほどの靈力はありません。ですから、木花散流比売尊の魂をお借りしました。木の花より散りしものもまた、やがて土へと変わるもの。土ほどではありませんが、水の靈力を削ぐことができます」

花夜の言葉通り、水霊は最早その形を保ってはいなかった。花粉と花卉が溶け混じり、泥の塊のような姿となり、地にもがいていた。俺は人の姿のまま水霊の元へ歩み寄り、濡れた花卉に埋もれた瓢の葉を手刀で両断する。霊媒を失った水霊は、ぴくりとも動かなくなった。

男達は花粉にむせび苦しみながらも、俺から逃げようと駆け出す。俺は指を鳴らした。木々の下生えの間に潜んでいた神使の蛇達が、ゆらりと這い出し男達の足に絡みつく。

「逃さぬ。お前達は余熱が冷めたら、どうせまたこの木を伐りに来るのだろうか？そうはさせぬ。せめて藤の木神がこの木を離れられるほどに育つまで、手出しをしてもらっては困るのだ」

「き、伐らない！伐らないから！み、見逃して下さいっ！」

「悪いが人間の言うことは信用できぬ。特にお前達、霧狭司の国人はな」

俺は男の一人に歩み寄り、その喉元に手刀を突きつけた。

「お止め下さい、ヤト様！」

制止する花夜に、俺は鋭く問う。

「止めてどうする。この男どもが本当にこの木を諦めると思うのか？たとえどれほど固く誓いをさせたとして、当てにはならぬ。人間は我が身可愛さに約束さえ平気で違える生き物だ。ここでこの男どもを始末しておくか、我々がここに留まり続けでもせぬ限り、この木を守ることはできぬ」

「武力で解決するだけが全てではありません！他にも方法はあります！」

花夜はそう言うと、再び五鈴鏡を手にとり踊りだした。

「千葉茂る花蘇利国の社首・花夜が祈がいます。天探女尊よ、我が身にその魂をお分け下さい」

花夜の瞳が妖しく輝く。俺は顔を強張らせて身を引いた。

「あ……天探女、だと……っ？」

『まあ、失礼な反応ですこと。せつかく力を貸して差し上げようとしていますのに』

花夜の身に降りた天探女は、なまめかしい仕草で髪をかき上げると、艶然と微笑んだ。蛇に捕らわれた男達は、いつの間にか悲鳴を上げることも忘れ、その姿に見入っている。

『ねえ、あなた達。このままこの神に殺されたくはないのでしょうか？』

俺を指差し、天探女が男達に問う。男達は呆けた顔のまま激しく首を縦に振った。

『でも、このまま手ぶらで帰って咎めを受けるのも嫌なのではないでしょうか？』

男達は再び首を振った。その瞳は虚ろで、正直に答えれば己の不利に働くという考えすら、今は浮かばぬように見えた。

『だったら良い方法を教えてあげましょう。霧狭司の神祇官にはね、こう伝えるの。`行ってみたら、藤の木は根が腐り枯れておりました、って。こうすれば、あなた達が咎められることはないし、この神に殺される危険を冒してもう一度木を伐りに遣わされることもないでしょう？』

男達の顔が明るく輝く。天探女はいたずらっぽく笑んで俺を振り返る。俺はしぶしぶ指を鳴らし、神使に男達を解放させた。男達は奇妙な笑みを顔に貼りつけたまま、後も見ずに駆け去っていく。

『これで、ひとまずは安心でしょう。私の暗示に逆らえる人間などいませんもの』

「さすが、人の心を惑わし、真実をねじ曲げることには長けているな」

『いつでも真実ばかりを口にすれば上手くいくというものではありませんわ。嘘が悪いもののように言われるのは、皆がその使いどころを間違えるからです』

「その使いどころを違えて主を死なせた汝がそれを言うのか」

『あら。あなたこそ、そんなことを言える立場ではありませんわよね？今でこそ、神と呼ばれ畏られていますけど、元は主さえその身で殺めた荒ぶる精霊ですものねえ』

その瞬間、残酷な情景が脳に蘇った。全身に浴びた血潮の熱さと、鉄錆びたようなその匂い、その中で己の発した叫びさえもが、今この場で響いているかのように鮮明に蘇っていた。

——真大刀！目を開けよ！このようなこと、あつてはならぬ！お前までもが命を喪うなど、あつてはならぬ！

俺は天探女を睨みつけ、低い声で告げた。

「助力には感謝しよう。だがその身から疾く去ね。それは我が巫女の肉体だ」

『言われなくても、もう行きますわ。あなたのように無礼な男神とこれ以上話していただくありませんもの。あなたみたいな神の巫女が、こんな善い女子だなんて、勿体ない限りですわ……』

最後まで恨みがましい呟きを口にしながら、天探女は花夜の身を離れていった。俺は過ぎし日の幻に心囚われたまま、ただぼんやりとそれを見送った。

「ヤト様、大丈夫ですか？」

我に返った花夜が心配そうに顔を覗き込んできた。

「あの……っ、あなた様のお気持ちを無にするような真似をして申し訳ございません！決してあなた様のことを疎かに扱っているわけではなく、ただ、でき得る限り人死にを出したくないという、その一心で……！」

天探女を身に降ろしていた間のことを何も知らぬ花夜は、俺の呆けた顔の意味を別に解釈したのか、必死に弁解してきた。

「気にしてはおらぬゆえ、謝る必要はない。俺を止めたお前の判断は間違つてはおらぬ。まさか天探女を出してくるとは思わなんだが」

人心を惑わす天探女を快く思う者はあまりおらず、崇めるどころか、後の世には神であったことすら半ば忘れられ、妖のように扱われることとなる。そんな女神に祈りを捧げ祭祀る女子がいるなど、俺はこの時まで想像したこともなかった。

「世の中の物事には、どんなものであれ存在する意味があるのだと、母が申しておりました。ですから……きゃっ!？」

花夜の言葉は彼女自身の悲鳴によって途切れた。目を移せば、俺達はいつの間にか人ならざるモノたちに囲まれていた。緑の髪に花や果実を絡ませた彼らは、こちらをじっと見つめ、何事かを口にする。だがその唇から零れるのは、まるで木の葉擦れのような「ざわざわ、ざわざわ」という音ばかりだった。

「……ヤト様っ」

花夜が怯えたように、救いを求めるように俺の衣袖を握ってきた。その時、藤の木の元で光が弾けた。白に、黄金に、虹の七色……ありとあらゆる色彩をひとつに凝縮したような、美しい

光だった。

「お守り下さり、心より感謝申し上げます。蛇と大刀の姿を持つ神、そしてその巫女姫」

光の中から現れたのは、一柱の女神。白藤を思わせる純白の髪に藤紫の瞳、肩にまとった花の比礼を風にひらめかせるその姿は、まさに藤の木の女神にふさわしいものだった。

「藤の木の女神様……。無事に御降臨なさったのですね……」

女神の姿にうっとり見惚れる花夜のそばに、人ならざるモノたちが歩み寄る。相変わらず、ざわざわと言葉にならぬ声を出しながら、花夜に向かって手に持った何かを差し出す。困惑する花夜に、女神が優しい声で語りかける。

「この霊たちは木霊。この杜の木々に宿る精霊が人の形をとったものです。あなたに杜の木を守ってくれたお礼をしたいのだそうですよ。どうか受け取ってあげて下さい」

「そうでしたか。ありがとうございます」

花夜が両手を差し出すと、木霊たちは次々とその上に、団栗、山漆の樹皮、呉桃の実などを乗せていった。

「これは橡の実、それは黄櫨の木の皮。どちらも染料として使えます。そちらは呉の実、油が採れますよ」

木霊たちの贈り物はどれも森ではありふれた、しかし使いようによっては日々の暮らしをより豊かにしてくれる品ばかりだった。藤の木の女神はそれら一つ一つを木霊の言葉を通訳しながら説明してくれる。

やがて最後に、ひどく怖ず怖ずと遠慮がちに、花夜の手のひらに幾粒かの種が置かれた。その種を渡してきたのは、他の木霊たちより一回り小さな木霊の少女。彼女は消え入りそうに小さな声で「さわさわ」と囁きかける。

「あの……彼女は何と言っているのでしょうか？」

「それは花の種だそうです」

他の木霊の陰から顔だけを出し、恥ずかしそうにこちらを見る木霊の少女を、藤の女神は優しい目で見つめる。

「何の役にも立たないかも知れないけれど、今の自分に用意できるのはその種だけだから是非持って行って欲しい、と言っています」

「役に立たないなんて、とんでもありません。郷の皆に良いおみやげができました」

花夜の言葉に藤の女神は笑みを深くする。

「その花にはまだ名がありません。よろしければ、あなたが名付け親になってあげてくれませんか？」

「え!?私!?そんな……、よろしいのですか？」

「ええ。あなたなら良い名を付けてくれるでしょうから、きっとあの霊も喜びます。それと、木霊たちとは別に、私からも是非お礼をさせて欲しいのですが、何か望みはありますか？」

女神の問いに花夜はしばし考え込んだ。女神に望みを叶えてもらう機会など、一生に一度巡ってくるかも分からないものだということに、花夜が選んだのは、あまりにもささやかな望みだった。

「では、私の古里・花蘇利国の今の様子を確認して頂くことはできますか？」

俺は思わず花夜の衣袖を引き、囁いていた。

「お前、いくら何でも欲が無さ過ぎるだろう。今少し、とっくりと考えたらどうだ？」

「でも私が今一番気にかけているのは花蘇利のことですし、それに……」

花夜は一旦言葉を切って俺を見た。

「今までで一番叶えたかった望みがこうして叶っている以上、他の望みなどそうそう思いつきません」

その笑顔に無性に気恥ずかしさを覚え、俺は知らず外方を向く。

「では、花蘇利の国内に立つ藤の木の木霊たちに、巫女姫の古里の今の様を訊いてみましょう」

藤の女神はそう言うと、髪から藤の花の挿頭華を一つ引き抜き、耳へと押し当てた。しばらくの間、声無き声で遠く離れた木霊たちと話をしていたようだが、その顔は次第に険しいものへと変わっていった。

息を詰めて見守っていた花夜に向き直り、女神は悲痛な顔で告げた。

「巫女姫、あなたの国には今、他国の兵士が数多く入り込んでいるそうです」

「え……」

花夜は一瞬呆けたような顔をした後、すぐに言葉にならぬ悲鳴を上げた。

「花夜！」

崩れそうになる身体を咄嗟に支えようと、花夜は震える腕で俺にしがみついてきた。

「そんな、まさか……こんなに急に……。よりもよって、私のいない、こんな時に……っ」

「心当たりがあるのか、花夜！」

うわ言のように呟く花夜に問うと、花夜は泣きそうな顔で頷いた。

「心当たりは一つしかありません。……『水響む霧狭司国』……」

その名に、再び俺の脳に過去の光景が溢れ変える。過ぎ去りしあの日、俺のいた国を襲ったのも、そして、俺の大事な人間を死へと追いやったのも、霧狭司国だった。

水響む霧狭司国。風火水土のうちの一柱、水神を鎮守神に持つこの大国は、己の勢力をより強大強固なものとするため、周りの小国を次々と攻め滅ぼしてきた。直路の地を戦場とし、人間の住めぬ荒野へと変えたのも、この国だった。

「早く……、早く戻らなければ……皆がっ」

「ああ、そうだな。すぐに行こう。花蘇利国へ」

嫌な予感に胸を塞がれながらも俺は言った。できることならば、そんな危険な地へ戻らせたくはなかった。だが決して花夜を止められないことも分かっていた。たとえ死の危険を伴おうとも、最期まで国を守るのが、社首——国の神社を統べる長たる者の責務なのだ。

「お気をつけ下さい。花蘇利国には兵士だけでなく、霊力の強い巫女も来ているようです」

藤の女神の忠告に、俺はただ黙して頷いた。

この本について。

この本について

この本は[ファンタジー小説サイト「言ノ葉ノ森」](#)



で連載中の  を電子書籍化したものです。

電子書籍版はスペックの都合上、

サイト版よりも機能 (※) が減っています。

(※用語解説機能や文章描写切替機能、雑学コラム等)

また、サイト上では物語が完結していますが、

電子書籍版は少しずつ作成していますので、

完結までに時間がかかります。ご了承ください。

(続きが気になる方は、上のタイトルロゴをクリックしていただくと、

サイトのもくじページへ飛べます (※2)。

(※2) オンラインでないと飛べません。)

花咲く夜に君の名を呼ぶ

<http://p.booklog.jp/book/119416>

著者：津籠睦月

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mtsugomori/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/119416>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト